三河アララギ

平成二十八年

七　月　号

第六十三巻　第七号

ニューヨーク日記（117） http://blueshoe.copetin.com/

BlueCat, Shoe Lady

Manolo's Empanada in South Beach　March 19, 2016

Blue Shoe Diaries

食べて育ったから好きなんです。エンパナーダ! ひき肉、オリーブ、ゆで卵、レーズンの入ったアルゼンチンのミートパイ。マイアミではよく売られていてついつい買って味見! おいし〜

I eat empanadas (the traditional Argentinian types) as if I have an addiction to them ? Manolo' s served piping hot! And authentically and casually yummy!

目次

第六十三巻第七号（通巻七五一号）

表紙・唐三彩ノ大皿　御津　磯夫（1）
ニューヨーク日記（117）　Blue Shoe（2）
ノボタンの窻　御津　磯夫（4）
歌集「はゝきくさ」　大須賀寿恵（5）
歌集「草々」　今泉　米子（6）
紫陽花の季　岡本八千代（7）
風神　今泉　由利（8）
姫女苑　弓谷　久子（9）
滝しぶき　青木　玉枝（10）
沙羅の薄葉　内藤　志げ（11）
野山の新緑　林　伊佐子（12）
葱坊主　安藤　和代（13）
成長　鈴木　孝雄（14）
新緑の　清澤　範子（15）
蕺草　足立　晴代（16）
開花す　阿部　淑子（17）
光陰矢の如し　伊藤　忠男（18）
武蔵野　森岡　陽子（19）
野面積み　白井　信昭（20）
はなみずき　近藤　映子（21）
日本が好き　杉浦恵美子（22）
笹百合　山口千恵子（23）
引き算　夏目　勝弘（24）
歌集「夢のつづき」　水上　信子（25）
『ことよせ』　いーはとぶ（26）
石田　文子（26）

現代学生百人一首
森　厚子（26）
山崎　俊子（26）
三田美奈子（26）
水野　絹子（26）
牧原　規惠（27）
稲吉　友江（27）
鈴木美耶子（27）
吉見　幸子（27）
牧原　正枝（27）
東洋大学　（28）
斉藤　叶（28）
佐藤なつ美（28）
保坂　陸斗（28）
渋谷　拓（28）
星野　裕司（29）
矢吹　由伸（29）
岡田　花音（29）
白坂莉夏子（29）
夏目　勝弘（30）
森岡　陽子（30）
今泉　由利（31）
田中　清秀（32）
重野　善恵（32）
今泉　由利（32）
米田　文彦（33）
山元　正規（33）

「私の一首」
山迫　京子（33）
森岡　陽子（34）
植村　公女（34）
正岡　子規（35）
田中　清秀（36）
丸山酔宵子（38）
米田　文彦（40）
大橋　望彦（42）
今泉　雅勝（44）

『俳句』
かさね吟行会
『酔いの徒然』（51）
本からのあれこれ（8）
ある自然科学者の手記（50）
絹の話（68）
短歌に詠まれた茂吉　五十八回
鮫島　満（46）
楽しい時間（44）　山本紀久雄（48）
「楽しくマナー」（13）　辻　照子（50）
『歴代天皇御製歌』（五十九）　貫名海屋資料館（52）
童謡『ざくろ』　高橋　育郎（53）
「氷魚」のことから（186）　岡本八千代（54）
「佐渡が島」を地図に辿る（3）　夏目　勝弘（55）
短歌雑誌「三河アララギ」のこと　岡本八千代（56）
編集室だより（二〇一六年　五月）　三河アララギ（58）
野菜の花（1）　鈴木　孝雄（59）
お知らせ・「三河アララギ」について（60）

ノボタンの窻（昭和二十九年～昭和四十年）

御津磯夫

生きをりて長きなげきをいひましきこの花かげの浄しましろし

夜ひらく花しろくして人はみな白きをくぐりかへりゆきたり

あかときのあつき曇りにこゑかれて啼きすぎゆきぬ明鳥のこゑ

庭の上の光に蜂のとびめぐりまた妻とただふたりのこりぬ

この年のダチュラの花の終りにて月の光はよひよひに増す

道標にしたがひゆけば雪とくる元伊勢宮のまへをよぎる

星越の低き峠をこゆる道さながら古き人の香のして

若葉木のしづくの雨は山みちの石にあまねき苔をぬらせり

白萩の花いまだなるを分けて入る君が書屋につひに到りて

白き芙蓉白き光を放ちつつ見おぼえあるごとき芝の中の石

歌集「はゝきくさ」II

大須賀寿恵

み社の木蓮格子にあひ寄りて拓本とらむ風凪ぐを待つ

京ヶ峰の紅葉に夕光残りゐて聾唖研究の会終りたり

石畳に吾影小さくうつりつつ玉黄楊光る庭帰るなり

臥床より見えゐる電線の大きく揺れ鳶かとも思ふしばらくのあひだ

刈りこみしくちなしに実の赤き見て新任教員の指導会始む

花十花ひらききりをり花キリン未だ葉のなき刺のあひだに

垣根越しに抱へ受けたり長崎よりさげ来しといふ文旦二つ

棕櫚竹の秀に朝の日の黄に射して痛む左手を右手にて叩く

浴槽にまなこ閉ぢつつ浸りをり土間の浅蜊の塩ふくきこゆ

古き葉を舞ひ散らしつつ街路樹の楠くれなゐの芽を吹き初む

歌集「草　々」

今泉米子

東京の櫻咲きゆく日和にてはじめての家に伴はれゆく
コンクリート打ちたる土間は野良猫の踏みたる跡のままに固まる

茂吉先生二首

物置の壁に吊りたる草鞋二足三十二年の埃つもれり
草鞋にて茂吉歩みき引馬野に時雨のふり沁む一日なりき
紫の小花集まり咲く花の年々にして四十年
もの音の静かになりしを思ひをり梅雨に入りたりと云ふ夕べにて
竹藪の下をおほひて花むしろ白花ハカタカラクサ勢ふ今年も
購ひて宝のごとくしまひ置く何時使ふかもしれぬ行平
やうやくに夕べを坐るわが前に今日の佛桑華の花萎えてゆく
槇垣を被ひからみて重々しびんばふ葛に負け果てにけり

紫陽花の季（とき）

蒲郡　岡本八千代

紫陽花の季の来たれば遠偲ぶ天空の先生奥様友友を
仲良しの友との文通も跡（と）切れつつはや西空の茜は淡し
わが古き本より一枚の絵ハガキ出づああ漱石筆の「紫陽花図」にて
疱疹に微熱のつづく今のわれ何いただきても嬉しかりけり
頂きし白絹のパジャマ広げ見るたちまちかがやく今日の昼ひかり
スイトピー淡きネッカチーフを首にかざり久々人に逢はむとするの
また来てねとは言はずしてただ手をふり姿見えなくなるまで送りぬ
きのふつひに「伊勢志摩サミット」了わりたり今朝（けさ）わが庭に白花紫陽花
二日間のサミット中の空の色に心配したるわが心かな
十字白き十薬ばかりの草の中佇ずみておもふ君との別離

風神

東京　今泉由利

荒川と綾瀬川とに添ひゆきぬ江戸より続く花菖蒲園
江戸の世を今に繋ぎて花菖蒲入(はい)りゆきゆく浮世絵のなか
ひとつ家満たして香るカモミール宅急便にて今朝早く着く
渓谷を吹き抜く風を起せしかバーミアン壁画は風神描く
ゼウス神の欠片(かけら)となしり左足しっかり仕舞ふ心のなかに
風袋背負ひて風神バーミアン伝ひ来たりて日本の風神
蚕繭(さんけん)を口にふくまれ糸引きいだし天照大神養蚕創始
行く道の長実雛罌粟(ながみひなげし)ゆらしゆくコクリコともアマポーラとも
朝に咲き夕に散りゆく帰化植物心に深く長実雛罌粟
そえ棒にわずか添ひゐる茄子苗に無駄なき花のひとつ咲き初む

姫女苑

豊川　弓谷久子

嬰児と等身大の人形の着がえの服を作りてやらむ
着せかえし人形の服はみかん色我も暫し抱きてゐたり
健康運はみどり長寿は紫と子は編み続く縁起達磨を
道の駅にて買ひ来て呉れしかそら豆の緑の厚き皮をむく
姫女苑と名を教はりき歌会の帰り遠くなりたり師も先輩も
黄にうれしこの麦畑に今日も佇つ昔習ひし麦秋の季と
白爪草の咲く畦に佇ち麦を刈る父と母のまぼろしを追い
用水路に水音高しひと日にて早苗田となるこの清々しさよ
はるかまで小さき苗が並びをり水満々とはられし早苗田
サミットの二日が無事に過ぎゆきぬ只それだけでよしと思はむ

滝しぶき

新城　青木玉枝

空と海故里出でて山と空朝夕ながめ老いてゆくかな

滝の音楽しみて乗るバスの中運転手さんと私とだけの

滝しぶき橋の上にて運転手さんと二人のながめぜいたくな旅

冬銀河いつしか霞（かすみ）の山並みに手をかしげ見る朝の庭にて

春彼岸亡夫（つま）の墓前に久し振りしばらくヂツと手を合せたまま

夫逝きて三十年の独居は何から話をしませうか

墓前にて話のつきぬしばらくは涙こぼれて縁（えにし）を思ふ

雛節句端午の節句も終りたり梅雨期をむかへ衣類の整理を

残り世を思へば悔いと反省と夜空の星をながめてしばし

荘に入り二度目の夏を迎へたり海辺恋しや故里の海

沙羅の薄葉

豊川　内藤　志げ

微睡(まどろみ)の間(あわい)に雨か窓際の沙羅の薄葉に雨粒光る

草径にチョトコイチョトコイの声高し澄みた空に響き消へゆく

痛きこと言い訳ならぬ今月も穂の原歌稿忘れていたり

くり返す歌稿忘れも咎めずに穂の原五百三十号届く

うかうかと友とのランチをたのしみて歌稿忘れるわれとなり果つ

東の藪照葉の中に黄葉(もみじ)する椿を眺む夕凪の中

茄子胡瓜媼はわれと競うらし野菜作りはとにかく楽し

夜の内に代掻きほどの潦朝(にわたずみ)の歩みやわらかき径

そよぎなき篁抜き出で真に立つ今年の筍裏の窓より

網を引きテープと杭とを揃え置き今日はお終い暮れなずむとき

野山の新緑

岡崎　林伊佐子

雑木も草も萌えたる新緑の野山すがしく散策たのしむ
野の道に車前草の花咲きゐたり昔のままの土の坂道
竹の子は若皮（かわ）を脱ぎつつ伸びてゆく五月の風にさやさやゆるる
裏山の榎の枝をゆるがして帰宅するとき野猿（やえん）が見てをり
畑土は陽を吸い雨吸い春野菜の姿かえつつ育ちてゆきぬ
家事に追われ農仕事に追われて生きて行くすこやかなりし老いの幸せ
恩師より賜わりて学ぶ「作歌の友」われの拙なき歌を導く
難聴のわが手に文字書き先生は教え賜ひし東京歌会
若き日の突発難聴のりこえて子育て思う老いたる今は
甘藷さす畝床作る鍬先に触れたる蛙の逃げゆくはやし

葱坊主

豊川　安藤和代

戯れに庭に蒔きたる豌豆の朝餉の卓に主役をつとむ
受話器から孫合格の喜びを告げくる友の声の華ぎ
父の事辛口の孫も父親と同職につけば指導受けおり
教師たる息子よ孫よ吹きすさぶ世の中なりとも突き進みゆけ
畑隅に残されている葱坊主天道虫を丸く遊ばす
若いとは唯それだけで素晴らしい吾が胸を打つ柿若葉風
しののめの野は草刈機の音響き青草香りて夏に入りゆく
ひかえめとやさしさ強さ織り混ぜた母を思わす馬鈴薯の花
用水の水増す岸にスカンポの紅伸びて初夏の風
野の道の恋しからんや舗装路のすき間に小さく昼顔の咲く

成長

沼津　鈴木孝雄

橙の樹上の実を落とさずに白い花の成長見守る
コンデジの操作分からずヘルプ見る日の丸家電は機能過剰
ツツジ枯れアジサイ花芽覗かせる近頃早い季節の移ろい
釣り上げた小さな鯖を捨てにけりトンビも飽きたか堤に干上がる
塩害に耐え生き延びたピーマンの苗支柱の紐を一段上げる
インゲンの葉が黄変すウイルスを恐れてすべて廃棄処分
ソラマメの天を仰ぎし豆の鞘横に向き出し収穫サイン
エンドウの鞘すり合わす音を聴き平安人の逢瀬を想う
タマネギの日に日に球が土を除け花芽覗かす収穫催促
二週間やっと顔出す小さな芽根気修行のパセリの種蒔き

新緑の

春日井　清　澤　範　子

鳥が憩ふわが家の庭の椿にも初夏の風の吹き通りゆく

新緑の柿の若葉はさわさわとそよ吹く風にゆれて光りぬ

町内会費と赤十字募金の集金に娘と共に杖つきまわる

公報を十戸に配る役にして足弱りつも娘とまわる

自転車の右に廻るも上手なりリハビリ日々に楽になりゆく

腰痛きを言ふ夫が椿の消毒を今日一日の仕事終えたり

前立腺のホルモン剤をのむ夫の次の予約日をカレンダーに書く

苛立てる心に空を仰ぎ見る白雲は静かに形変へつつ

繁田川の水はかすかに流れゐる深みに新緑の桜葉写す

吾と同じ薬を飲みて勤めゐる娘を愛(いと)しく抱きしめるなり

蕺草（どくだみ）

東京　足立晴代

様々のばら咲きたりと姪よりの招き嬉しく娘と共に
そば打ちの専門家（くろうと）はだし主人とてもてなし厚く打つ舌鼓
霞ヶ浦望む家にて姪夫婦和かに過す幸なる日々
多勢の姪とばらとに囲まれて幸なりと思う一日
姪夫婦心優しく日々過す幸続くを祈るなりけり
様々の色あるばらの美しさつくり人の心あらわる
五月晴れ流れる雲に風立ちて眞鯉緋鯉の雄々しく泳ぐ
色深き紫の花菖蒲あり男の子の祭に色をそえたり
蕺草の白き花つけ可愛ゆらし植木屋も裏庭そのまゝにして
詩を吟じ偉人の詩あまた知り大和の国に生まれて喜び

開花す

横浜　阿部淑子

脳梗塞の指で編み次ぐ膝掛けは友の拍手で嬉し涙に

熊本は一月経つも揺れ休まず支援の誠心乾燥野菜

他人からの認証ではなく貢献とアドラーの学説今や拡がる

日本の国立西洋美術館設計すぐれ世界遺産へ

活け花の仲間は去りて残されし黄百合は開花す願い叶えて

光陰矢の如し

大阪　伊藤忠男

ぼんやりと何するでなく喪に服す時の過ぎるは矢の如しなり
式花も萎れ寂しき霊前に何供えるか迷うこの頃
悲しみは犬とて同じ母の死にイライラつのり胃を壊したり
我が命我が身で守るしかなきやタンス片付けグッズ買い込む
マントルに突き上げられて大陸の動き微かもかくのごとしに
今朝もまた地揺れ軋む家屋ありいつになるのか平穏な日々
若葉から青葉に変わるはずなのに土色ならん黄砂覆う日
畦道を踏みしめ歩く五月末田には水満ち雨蛙鳴く
何がある目に見えぬもの何もない何もないけど心ここあり
汚れなく淑やかなりや小菊花誰とて足を留めるこの道

武蔵野

東京　森岡陽子

武蔵野の古びた祠に山桜寄り沿い見事今年も満開
光差す桜蕊降る川べりの木々は青葉と来年に向かふ
飛鳥山染井吉野の蕊の降る八重の桜と花水木と咲く
垣根には溢れ満ち咲く木香薔薇香り優く彩り優し
貝塚の遺跡並ぶる博物館昔は有りし東京牡蠣も
足利の史跡となりし学校の入園券は入学証と
歌舞伎座で爺に守られ初お目見え真中の孫はやっと二才に
風薫るターフを駆ける芦毛馬騎手の帽子赤色映える
濃緑（こみどり）に深まり行くは浅間山（せんげんやま）五月の風に向かひて登る
鬼怒川の吊り橋長く渓谷に看板は建つ熊に注意と

野面積み

豊川　白井信昭

相楽なる麓に工場稼働する人影を見ず音を聞くなし
乙川の堤防沿いに石垣の古絵図通り埋もれゐたり
深々と掘り下げられて五メートル長さは何と四〇〇メートル
石垣は野面積みにして枡出しの四ケ所ありぬ岡崎城に
石垣は城の防備と徳川の権威を示す象徴といへり
熊本に遠く離れて御堂山気にかかる日々の余震今日もまた
軒先のニオイバンマツリの若芽色あまた出で来し四月尽の日
音羽川朝の潮引く水面下きらめく魚動き鋭し
雨上がり御堂山低くかかりたる雨雲あまた動くともなし
風薫る新緑うるわしみ社の歩道を行けり朝のひととき

はなみずき

名古屋　近藤映子

愛知医大の通院途上街路のはなみずき白風にゆれをり

わが八階のベランダより東方山上に建つ愛知医大の新病院高し

見降しの川辺の若草一面に緑陰歩道は葉櫻繁る

五月十日は亡き夫のバースディ成り娘と二人のチーズケーキ

さつき晴れ葉櫻並木過ぐる先はなみず木の白い街路樹

伊勢志摩サミットニュースの続く五月晴れ早や真夏日告げぬ

伊勢志摩サミット終り米国オバマ大統領の広島訪問は

東京の時習六回生は水無月に昼食会を行うと便りにぬくもる

カーネーション白菊黄菊白百合と生けたれど夫の声なし

日中の気温は早くも夏日なり28℃は暑いよ暑い

日本が好き

蒲郡　杉浦恵美子

新緑の桜樹の彼方テレビ塔五月淋しき人との別れ
勤勉さ故に日本が好きと言ふ彼に仕事が見つかるとよい
登校の児童の列を横に見て垣根の草取り五月の朝の
子供等は学校へ行くさて我は差詰め今日は何処にも行かぬ
車付き買物バッグが売られをる鞄屋大伯母暮しし辺り
百年も経ぬに子の無きひろ伯母は我が記憶にも彼方に茫々
虫眼鏡確かに六匹一ミリのメダカ孵化せり我がリビングに
哀しみは繰り返せども薄れゆく五年を経ての我が心持
二十歳の我の書簡の理屈っぽさ態との漢字父にそっくり
関ヶ原の谷に満月出でにけり短き旅もあと一時間

笹百合

豊川　山口千恵子

移りゆきし骨董店は海岸通り入口近くに鶴頸の花瓶
ちろちろと流るる小川またぎ越へ筍掘らむ藪に入りゆく
筍を目指し唐鍬打ち下ろす切口みづみづ掘りとれにけり
掘りとればずっしり重き筍の切口白し香りさはやか
指し示す先に数本細々と今年も生え来し笹百合なりと
忽ちに牡丹の花も終りたり心せくまま過ぎしこの春
今朝の雨に青鮮やかに楓の葉レースのカーテンしばし明けをく
集落の人々総出の道普請田溝の草を刈りてゆくなり
黄素馨の花散りたまる一ところ黄色すがしき夕近き光に
蔓のびて巻鬚支柱にとりつきぬ黄の花つけし胡瓜もみゆる

引き算

豊川　夏目勝弘

懸崖なす梅に一輪が明日は咲く月ヶ瀬に行きて早くも一年

芭蕉翁の生地の梅はまだならむ景を浮べて思ひをかへす

山間（やまあい）の月ヶ瀬めぐり一年の過ぐ行きて得しもの形に出でこず

歯も髪も抜けしも生えくることはない殖えるはただ一つなりけり

形なきモノを求めて日び暮す形なきモノは場所を取らざり

引き算にて生きてきにけりまだ少し引きゆくモノが残りてをりぬ

こし方を思ひてみえば引き算の生活なりしと思ひに至る

掛け算に倍増ねがはずその値ゼロならよろしを最良とせむ

我が部屋の冬日を放げる今日の雲を憎みて遊ぶ本を片手に

歌集「夢のつづき」

水上信子

るり色の茄子の漬物さえざえと玉酒一献一夕の酔い

街路樹は白ばかりなる花みずき四月すがしき町に住みおり

幾千の命のみこみ崩れおつ摩天楼には神いまさずや

目をつむり空にありしを思うなり雨月はせつなき恋に似たるも

陽の光やわらぎ増してわが歩み遠くへ誘う武蔵野秋色

澄わたる初冬の空に思うこと平和平穏無事への祈り

酒を酌むおさな友らの談笑は際限もなく過去へ戻りぬ

冬の夜のとろとろ眠る夢の中己が姿をさがすわれあり

ふるさとの地平に立ちて見上げたる夢に出でくる空は真青

純白に無垢という言葉重ね見る桃のつぼみの丸き白さよ

『ことよせ』

（西浦公民館　いーはとぶ）

抱っこ紐に嬰児（みどりご）胸にお出掛けの新米パパは育メンとやら
芽ぶき増す雑草の中に一本（もと）の紫の濃きすみれ咲きをり　石田文子

「厚ちゃんの家はどこか」と友の聞く煌めく海をわれら眺めつつ
わが家は煌めく海の先にある西浦半島の岬のふもとよ　森厚子

赤と黄のランドセル背負ひ二人して手をつなぎ行く何やら楽しそう
イチジクは日に日に大葉におほわれて葉影のなかでかくれんぼかな　山﨑俊子

あの家に男の子生（あ）れしか鯉のぼりたかだかと舞ふ青空の中
鯉のぼりにみとれて歩む池のほとり吹きくる風によろめきにつつ　三田美奈子

桜咲く淡き花色空蔽ふこの夕暮れを惜しむが如く
思ひのたけ幾日かけて綴るのか老母よその文何方（ふみどなた）に宛てしや　水野絹子

夜半より嵐のごとき風のふきわが畑のネットふきとびてをり　牧原規惠

連休の予定はそれぞれ埋まりたるにわがカレンダーは未だ空白

帰りゆく娘と孫を見送りぬ無人駅のホームに葉桜光る　稲吉友江

亡き父の植ゑたるツツジの咲き誇る我が狭庭に今日のけぶり雨

楽屋へと戻るわれらに「フラガール」と声かけくれる小さきバレリーナよ　鈴木美耶子

今はもう下りることなき刈谷駅わが乗る列車の発車ベル鳴る

潤ひて新緑のわが庭に咲く花海棠の花再びの花　吉見幸子

いつしかに気づかひ出来る幼になり心の成長あああ嬉し

鉄格子二重にされたるバスに行く数多のライオン頭上の木にも　牧原正枝

いよいよに石楠花の花落花するその淡紅の淡きうつろひ

現代学生百人一首　東洋大学

祖父の背を洗い流すと申し出る言葉のいらない男の会話

山形県酒田光陵高等学校三年　斎藤　叶（きょう）

性格とピッコロの音共通点みんなと合わないチューニングの♭B（ベー）

山形県酒田光陵高等学校三年　佐藤なつ美

海岸で一人静かに釣りをするもう見られない地元の夕日

山形県酒田光陵高等学校三年　保坂　陸（りく）斗（と）

教科書をあと何ページめくったら本当の平和おとずれるのか

山形県立米沢興譲館高等学校二年　渋谷　拓

なあセミよ古文の課題伝えよキミも法師の端くれならば

福島県立磐城桜が丘高等学校三年　星野裕司

震災時分けが分からず泣いていた今は違うぞ役に立つ時

福島県立平工業高等学校一年　矢吹由伸

夏の日に満洲生まれの祖父に聞く戦後の日本と平和の尊さ

東洋大学附属牛久中学校一年（茨城県）岡田花音（かのん）

今朝もまた「宿題やった？」と母の声母にあわせてインコが真似る

東洋大学附属牛久中学校一年（茨城県）白坂莉夏子

私の一首

澄みわたる今日の青空に雲のなし明日は雨との予報いでをり

夏目勝弘

何も無い今の目の前の東の空。考えてみれば、今われわれが生活している空間は、有るが無い世界だと思う。目に見えるものは、すべて、いずれか無になってしまう。そして無いと思っていた青空に突然、白雲が流れてくる。しかし感じるものがあるはず、その感じることを写生する。それが真の写生だと思う。

坂道は若葉が眩し目白台細川家跡の永青文庫

森岡陽子

目白谷に屋敷跡を残す細川家。その中でも千利休の高弟としても有名な細川忠興（三斉）や吉田織部等、〝利休七哲〟と言われた同時代を生きた茶人の春季展が、その一画に有る永青文庫で行われていた。竹で作られた茶杓

一本にもこだわりや味が有り、利休の面影が感じられ偲ばれた。丁度新茶の美味しい時、ゆっくり一服したい気分になる。その時はどんな名を持つ銘菓をお茶請けにしようかな?・・・

行く道の長実雛罌粟（ながみひなげし）ゆらゆらとコクリコともアマポーラとも

今　泉　由　利

この頃、あの道この道、コンクリートの端っこにも、直ぐと立ちあがり可愛らしい花をつける帰化植物の長実雛罌粟。フランスや地中海辺りに居た時は「コクリコ」と呼んだ。北米では「ポピー」だった。アルゼンチンでは「アマポーラ」と呼んでいた。

今、日本に帰っていて、それぞれの地での、この花咲く風景を思いだしつつ懐かしい。

阿片になるアルカロイドを含まないケシ科の一年草。また来年逢える。

『俳句』

舞ひ終る若葉の影の神楽殿
かけ声と半被とそろふ小神輿
青い目の担ぎ意気込む三社祭

田中清秀

窓放ち押入れ放ち五月風
夏祭り腕突っ込んで摑み取り
初鰹買ひし夕餉のビールかな

重野善恵

菖蒲園最初の花に集ひけり
夏安居と決めて籠れりこの日頃
茄子苗に無駄なき花の咲きにけり

今泉由利

くれなゐを闇に重ねて夜の薔薇
大皿に土佐の香りや初鰹
十年のつもる話やビール酌む

米田文彦

麦熟れてたひらに風の吹く日かな
目地深く入りて真黒き黴の花
渋滞のバスの窓より宵祭

山元正規

捩花の素直に捩れてゐたりけり
祭太鼓に脅え暴るる子犬抱く
細波の立ちて輝く代田水

山迫京子

暗闇の府中の杜や祭笛
墓石は絆と書かむ夕焼空
ちぐはぐの高さの下駄や夏の宿

森岡陽子

歳時記の活字小さき昭和の日
ギャロップの二頭の馬や五月来る
はじまりもこんな風の日万愚節
轟音は雲の中なり莢豌豆
育メンの紐ゆるびをり若葉風
筍の泥乾きをり夕の市

植村公女

世の中の重荷おろして昼寐哉

子は寐たり飯はくふたり夕涼

すゞみがてら君を送らんそこら迄

一口に足らぬ清水の尊さよ

日本の国ありがたき青田哉

名も知らぬ大木多し蟬の声

送られて別れてひとり木下闇

見返るや門の樗（おうち）の見えぬ迄

一寸の草に影ありけふの月

正岡子規

かさね吟行会
「永青文庫と関口芭蕉庵」五月

田中清秀

肥後熊本藩細川家の下屋敷は文京区目白台にあった。現在この周辺は新江戸川公園や日本女子大学、お茶の水女子大学、ホテル椿山荘などが点在する文教地区となっている。今回のかさね吟行会はこの細川家下屋敷の一画に残る「永青文庫」とその近くの「関口芭蕉庵」を訪ねた。平成二十八年五月十三日、天候は晴れ夏の初めの風薫るさわやかな吟行日和であった。

永青文庫は細川家伝来の美術品や歴史資料に加えて美術の殿様と言われた十六代当主細川護立氏の蒐集品などを収蔵して保存と展示、研究を行っている。現在の理事長は第十八代当主の細川護熙氏（第七十九代総理大臣）である。門を入ると深い森林に包まれて都会の中心地であることを忘れさせる閑静な雰囲気、四階建ての文庫建物が四百年余の細川家の伝統を受け継いで静かに佇んでいる。初代細川幽斎（藤孝）、三齋（忠興）父子が親交を結んでいた千利休ゆかりの茶道具が多く所蔵されており、訪れた時にも「千利休と武将茶人展」が開かれていた。なかでも山鳥の尾羽飾りの立派な甲冑や刀剣、利休尻ふくらの茶入、銘ゆがみの茶杓、織部宛の肉筆書状など国宝・重文の名品が静かに展示されていた。

織部宛て利休書状や蔵涼し　正規
伝来の茶杓細やか風薫る　文彦

乱世の世を生きた武将たちが茶の湯の世界に見いだした美意識とは何であろうか。生死をかけた戦に明け暮れた中にあって、暫しそこに一時の憩いを求めたのかも知れない。残された本物と触れあうことでその武将達の魂と情熱が自然と伝わってくる。

永青文庫から関口芭蕉庵に向かう途中にはかなり急な坂道がある。自分の胸を突くように登らなければならないことから「胸突き坂」という。下ったところに木戸口があり中に入ると鬱蒼とした木立に古い池。ここは松尾芭蕉が神田上水改修工事に従事した四年間住んでいた「竜隠庵」の跡である。震災・戦災のあと園内を復元修理し芭蕉（はせを）の句碑なども建立し、関口芭蕉庵として現在東京都の史跡に指定されている。

椎若葉小さき注連張る屋敷神　正規
新緑の陽光はじく芭蕉庵　京子
新緑の匂ひ降り来る芭蕉庵　陽子

崖からの湧水で作られた古池は瓢箪池と名付けられ薄く濁っているがよく見ると錦鯉が池の底にゆったりと泳ぎ、甲羅干しの亀がのんびりとした時間を過ごしている。池の端には初夏の香りが漂い十薬の花や姫女苑などの草花、カラーの白い花が見うけられた。「ふる池やかはつ飛こむみつの音」と直筆を写した句碑があるが、ふる池は大津市石山にある岩間寺の池と言われているので実際はここではないそうだ。

芭蕉庵の古池巡り庭薄暑　さち子
薫風の池に亀干す甲羅かな　しのぶ
芭蕉庵句碑と古池に会うぞ嬉し　善恵

少し小径から外れたところに芭蕉の墓と記した案内板があるが、弟子達が近江の義仲寺へ墓参するのは大変なので芭蕉直筆の短冊など思い出の品々をここに納めお参りしたようである。芭蕉堂は芭蕉の木像が祀れているとのことだが残念ながら板で塞がれて見られなかった。園内中央の休み処に腰を降ろしていよいよ作句に入る。ただ、茂みの故か水辺のせいか蚊の寄ってくるのには閉口する、今も昔も蚊は人を悩ませる。

緑さす葉影を揺らす池の鯉　素山
俳聖の池に育ちし蚊に追はる　清秀

芭蕉は日本史上最高の俳諧師と称され生涯で九百に上る俳句を残したと言われ、ここにも多くの句碑がある。「芭蕉野分して盥に雨を聞く夜かな」、「つた植ゑて竹四五本のあらしかな」「道のべの木槿は馬に食はれけり」など石に刻まれて居並ぶ。

句会はこの芭蕉庵にある和室を借りていつものように嘱目三句、選句と講評を行う。俳聖芭蕉ゆかりの場所での作句はいつもと一味違うものとなったと思われる。帰路は近くの早稲田の杜を訪れカフェテラスで休息し無事お開きとなった。

■かさね吟行会■

日時　七月八日（金）
場所　川崎森林公園
集合　JR 溝の口駅 11時集合
申込　森岡陽子宛 (03)3712・2835

『酔いの徒然』（五一）

丸山酔宵子

『高遠の桜と黒松仙醸』

中央本線特急あずさに乗って信州伊那谷に向かうと、八王子を過ぎた沿線の山間（やまあい）は、桜が満開。晩春の日差しを車窓一杯に浴びると、「春眠暁を覚えず」心地よくうとうとし、ふっと目を覚ますと、広い車窓の外は桜の列が見事に連なっている。

中央本線は松本が終着駅で、諏訪湖の畔を走って行くのだが、今、将に諏訪大社の御柱の季節で、上諏訪、下諏訪の駅には提灯が賑やかにホーム一杯に並べられ、様々な色とりどりの法被を着た人たちがうきうきした姿で駅周辺に集まっている。岡谷で在来線である飯田線に乗り換えて、一度は行って、この目で満開の桜を見たいと思っていた高遠に向かって一路伊那市へ。

天文16年（１５４７年）武田信玄による築城以来、天下一の桜の名所として知られる高遠城は、伊那谷に広がる高遠町を一望できる小高い丘にある。高遠城を遠望するとピンク色に染まったこんもりした大きな雲が、浮いているように見える。高遠は大奥のスキャンダル「江島生島事件」でも有名で、七代将軍家継の生母月光院に仕える御年寄・江島が、歌舞伎役者の生島との密会を疑われ、評定所から下された裁決は死一等を減じての高遠への遠島（島流し）されたのである。何故か、高遠に相応しい艶めかしさのある話ではあるが・・・。

「桜の樹の下には死体が埋まっている」は戦前の作家である梶井基次郎の短編作品集『檸檬』に収録された短編の『櫻の樹の下には』の一節である。桜があれほど美しいのには何か理由がある、と桜の美しさに不安を感じる主人公が、死体という醜いものが樹の下に埋まっていると想像することで不安から解放される、という内容。成程、今日が満々開の高遠城一杯に広がる桜の下にいる

と、確かにそんな気もしてくる。

そんな狂おしい桜の下での一献は、高遠の城下町で慶応2年（1866年）創業の黒松仙醸。以来150年、酒造りの伝統は継承され、伊那谷で生まれた酒造好適米「ひとごこち」にこよなく拘る信州を代表する地酒なのである。

当主黒河内貴社長は慶応大学を卒業後、ロンドン大学（LSE: The London School of Economics & Political Science）に留学し、国際軍事戦略論を学んだ異色の経歴を持ち、しっかりとロンドン大学で学位を取得し、帰国後、酒メーカーなどでの修行もせずに、即座に黒松仙醸を先代から引き継いだのである。毎日試行錯誤の連続で、全国各地での試飲会やお得意様めぐりと忙しい日々を送っている。日本酒の輸出も虎視眈々と狙っていて、既にロンドンにも輸出を始めているそうだ。

現在日本酒は、米国をはじめ中国、東南アジアでも、現地の米と水を使い、現地生産してはいるが、これは本当の意味での日本酒とは言えない。日本の米と水を使い、日本で丁寧に日本の「もの造りの技」として造られた日本酒こそ、本当の意味での日本酒であって若き黒松仙醸黒河内社長は、その日本の文化としての日本酒の輸出を実現しようとしている。

高遠は四方八方狂ふ花

酔宵子

本からのあれこれ（8）

米田文彦

「夜中の一時間」

今年の本屋大賞に選ばれた「羊と鋼の森」を読んだ。ピアノ調教師として成長していく青年の物語であり、面白くて一気に読み終わるという性質の本ではないが、静かな筆致で美しい音の世界が展開される気持ちの良い本だ。

読了したのは夕食後しばらくしてから、その日は一杯やったせいもあり早めに寝てしまった。そしていつものように夜中に目が覚める。その日はぱっちりと目が覚めてしまい、ベッドでぐずぐずしていても寝られそうもないので、いっそのことと起きてなにか本を読むことにした。こういう時は面白い本や逆に難しすぎる本は駄目で、できたら懐かしい本が良い。宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」にした。

文庫本で七十五ページ、やや長いのだが仕方がない、何なら途中で止めたり飛ばしたりすればいい。

少年ジョバンニはお祭りの夜、天の川を巡る銀河鉄道に乗っている。北十字と白鳥停車場、鳥を捕る人に質問される。「あなたはどこからきたのですか？」答えよどんでいると「ああ、遠くからですね」と納得してくれる。ポケットに知らないうちに入っていた、どこまでも行ける切符。さそりの火。友だちカムパネルラも一緒だったが、おっかさんを見つけてほんとうの天上に消えてしまう。その席には博士がいて、これからの道を教えてくれる。そしてジョバンニは草の中に目を覚ましおかあさんのための牛乳を買って帰る。

夜中に一時間ほどを起きてしまったが、宮沢賢治を選んだのは昼間の「羊と鋼の森」の雰囲気に影響されたのだろうかと思う。清らかな本である。

私の長兄が亡くなってから十年を過ぎた。

大学生時代はヨット部で活躍し、前の東京オリンピック強化選手に手を挙げないかと誘われたこともあった

が、就職が決まっていた銀行員の道を選んだ。転勤、単身赴任なども経験して支店長になり出向・再就職。しばらくして脳梗塞で倒れたのは酒好きの影響もあっただろうが、働き過ぎ、労働過多のせいだと思っている。初めての土地の初めての企業でなにもかも任されてしまったらしい。特別にやり手という感じでもなかった（と思う）兄にはしたたかな商売人たちとのやり取りは荷が重かったのではないかと思う。

脳に障害を受けたために右半身が動かなくなり失語症にもなったが、そこから兄はリハビリに励んだ。歩行訓練や体操は勿論、病院で行われていた機能訓練のひとつとしての川柳作りにも励んだ。

失語症は普段のことば「おはよう」が出てこなかったり、思っていることばを発音できなかったり、聞いたことばを理解できなかったりする症状だという。

川柳は十数人で週一回、テーマを与えられイメージを膨らませてまとめていく。皆でいろはカルタ作りにも励み、最初の「い」の句は「いろはのい、いのつくものに、何がある」だ。

兄の作ったのは「まけないぞ、ことばで励む、長い道」だった。

おしゃれで、きれいな字を書き、器用でもあった兄は左手で上手に字を書いた。私の下手な字など見せられなかった。左手で書いた色紙が手許にある。

「うづみ火や終には煮ゆる鍋のもの」の句（蕪村）と黄色い柚子が二つ描かれている。

銀行退職の頃だったのだろうか、脚付きの将棋盤と文字の盛り上がった駒を買っている。「そのうち将棋を趣味にやりたいと思ったんでしょう」と残された義姉から聞いた。小さい頃、縁側で私とも将棋をした覚えもある。それは紙の将棋盤だった。兄が買った将棋盤と駒もいまは我が家にある。

私もそのうち将棋を趣味にしたいと思っている。兄は七十五才で亡くなり、そして私も七十才を過ぎた。

ある自然科学者の手記（50）

大橋望彦

『生・若・老・死』

9）「信州の疎開先にて」

武田信玄の軍勢が信州塩尻から松本に向かって進行し、南安曇郡の小倉村付近に兵を進めた。その軍勢の中に我々の祖先である小倉某がいたらしい。どういう経緯があったのかは詳らかではないが、この小倉某の姓も其処の小倉村に因んだのか、自分の名前を村の名前にしたのかもハッキリしないが、その後は村の長として君臨していたようである。どういう経緯が有ったのかは判らないが、その後松本城主に藩士として仕えるようになり、代々松本城主に仕えることとなっている。この事は、小生の祖父が書いたメモ帳のような書物が辛うじて戦禍を逃れて小生の手元にあったので判ったことである。それ以外に沢山の系図や書物があったのは記憶にあるが、全て原宿の家が戦火で灰と化したときに一緒に無くなってしまったのである。それらの事とは全く関係が無く、戦時疎開する段になって、母方の従兄弟（故中沢有斐氏）の家が同じ南安曇群の梓村に在り、祖母と母と弟、妹の四人が取り敢えずその家の一部を使わせて頂く事となった（いわゆる縁故疎開の走りであった）。

10）疎開の時にその引越し荷物の中に刀箪笥があった。近所の人達は、逸早くそれが刀箪笥であることを見ていて、そのことが後々に問題となるとは少しも知らなかった。

11）疎開学童いじめが盛んにあったのは事実である。

12）疎開者であったが一方のガキ大将となって威張っていた。中学の三年生（旧制）で、松本市内にある深志中学校（当時ある種のエスカレーター・コースとして、深志中→松本高等学校→東京帝国大学ということで、比較的有名校であり、トンボの形が校章になっていて、トンボ中という愛称があった）に転校をするかどうか父と大分話し合ったが、その当時深志中に通うには、梓村からは二里（4㎞）の路を歩いて一日市場駅（当時の大糸南線）から松本まで行かねばならず、或いは、やはり二里の道を歩いて新村駅（島々鉄道）から松本に行くか、一時間に一本のバスを利用するかのいずれかを選択しなければならなかった。結局、父の赴任先の網干から姫路中学に通うことを選択したため、深志中には縁がなかった。しかし姫路が戦災で全焼し、休学を決めたため、網干にいるか、あるいは信州にいるかの生活となった。

信州に居れば、只ボーとしている訳にも行かず、男手の少なかった農業のお手伝いをすることが多かった。そこで色々の野菜の作り方を教わりながら随分その当時としては頑張ってお手伝いが出来たと思う。農地は沢山あったので、じゃが芋、たま葱、長葱、大根、白菜、キャベツ、人参、トマト、胡瓜、茄子、畔豆（あぜまめ）、豌豆（えんどう）、インゲン豆、南瓜（かぼちゃ）、西瓜（すいか）、

等々なんでも自給した。それに、田圃の世話がメインの仕事であるので、畔つくり、田の鋤返し（馬の世話から）、田への水引き、田植え、草取り、稲刈り、稲干し、脱穀、俵詰め、藁干し、精米、まで一連の仕事が米作りであり、全て一つも手を抜くことは出来ない。この全てを手伝い、米が収穫された時の達成感は、未だに忘れられない特殊な感激に近い思い出となっている。それと同時に、中学生であっても、完全に一人前に扱われ、頼りにもされたということは、人間形成の上には、重要な時期にあっただけに、責任感ということを自然と身に着ける結果になったと思う。中学三年生というと、先程のように一人前の大人扱いをされているだけに、中学一二年の餓鬼供には足元にも及ばない大先輩と思われていた。その頃の一年先輩はもう大先輩だった。ましてや小学生は神様の言うように、言うことを聞いた。「おい貴様、あの木に登って柿を採って来い」などと命令を下せば、大喜びで木をよじ登っていった。だから、時々大勢のチビ達を引き連れて、稲刈りの終わった田圃の中で戦争ごっこなどもした。そのときは、勿論、一方の大将であった。しかし、それは当たり前で、ブラブラしている中学生などは余り居なかったからで、敵方には強い大きな子は居なかった。

13） お酒の配給があるので、北の家（屋号）まで取りに来るようにと、連絡があった。親父さんの分として清酒が二升貰えるそうである。極めて貴重なお酒のこととて、小生が受け取りに行った。暮れに近い夜道で、雪も可なり積もっていたが、二・三百メートル位の道を北の家まで辿り着いた。村の衆が大勢集まっていて、すでに宴会が始まっていたのである。確かに二升の清酒を戴き、帰ろうとした所、「まぁいいずら、一寸呼ばれていきましょ。さぁさぁ、なに、未成年なんぞ関係在りましなんだ、まぁよく来なさんした。さぁあがりましょ。」という訳で、茶碗に白く濁った濁酒をなみなみと注がれ、次から次と村の衆の餌食となってしまった。別に悪意ではない事とは判っていても、そんなに飲めないと断っても、「もっとあがりましょ。お酒に強いずらよぉ。」と勧められ、断りきれずに飲んでしまうといった具合に次第に宴会のど真ん中に入ってしまったのです。中学の三年生というと、その頃はもう一人前に扱われていたので、村の衆といつかは一緒になって飲んでいたようです。それでも大事なお酒を持って帰らねばならないと思い、礼を言って座から抜け出し、一歩外に出た所で、足が思うように動かないことが判った。こりゃあ酔っ払ってしまったぞ、と思ったが、いや大丈夫と帰途に着いた。しかし、雪の道にふらふらの千鳥足では、まともに歩ける訳は無く、何時しか道を外れて、田んぼの中に、もっともその頃の田んぼは雪の原っぱではあったが、すっぽりと嵌っていたのに気がついた。しかし、なんとも足がいうことを利かないのである。暫く、ほんの暫くの間と思ったが、酔いを醒ますのにひっくり返っていた。

絹の話（68）

「アトリエトレビ」今泉雅勝

東京農業大学オープンカレッジ

【開講への経緯】

２００８年よりワイルドシルク協議会（野蚕の糸や布、洋服や靴下等を扱う業者で組織：理事長今泉雅勝）は東京農業大学の「食と農の博物館」の１階展示会場で「ワイルドシルクフェスタ」を３年間（３回）開催し、世界の各種野蚕繭（金繭、銀繭、ラグビーボールの様な巨大繭等々）、内外の糸や布、洋服やバッグ、小物など現地の写真と共に展示して関係国の大使を招聘し、大学教授、研究者の講演、糸作り技術者や染織家による体験講座、シルク入りパンやうどんの食味体験、真綿クラフト体験製作コーナー、映像コーナー等日替わりで盛り沢山のイベントを組み込んだ研究者や好事家ばかりでなく、老若男女幼児まで楽しめる企画を展開し、１日平均千数百人の来館者があり、著名講師の時や食味体験、通常経験出来ない貝紫染め実習などは超満員の盛況で２週間の会期が短く感じるものでした。しかし、いつもの静かな博物館らしくない状態を危惧した新任の館長は４回目の開催を歓迎して下さいませんでした。短い間でしたが多くの絹理解者やシルクファンを育てる事が出来ました。この中には個人でシルクミュージアムを開館するという人が出て来ています。この事態を憂慮したこの企画の担当教授（応用生物学：日本野蚕学会会員）はこれに代わるものとして一般の人が受講出来るオープンカレッジを提案して、それが出来るよう、このカレッジの担当教授になって下さいました。２０１１年より大学の教室や実習室で座学、体験，実習等を続けています。私も長年、野蚕シルクと向き合って経験して来た事を「知っておきたいシルクの常識」として１コマ担当させてもらっています。

【開講への切実な思い】

年々絹を知る人が少なくなって来ているのは寂しい事です。何処に行ってもネクタイやストールを除いては絹１００％のものは殆ど売っていません。

売っていても売場の販売員に絹の知識が殆ど無く品質表示と洗濯表示が拠り所でしょうか。

この様な体たらくですので絹は次第に一般人から疎んじられ、特殊な世界へ押しやられてしまっています。絹

の販売現場でお客様に最初に質問される事は、「絹は洗えるのですか」、「洗ったら縮んでしまったがどうすればよいですか」、「アイロンはした方がよいか、その温度は」「虫に食われるのか」など殆ど維持管理の話です。この様な質問をする人は一度ならず自分で洗濯して元に戻らなく意に添わない物になってしまった事がある人です。

此れ等の質問には30秒以内で答えないと「そんなめんどうな事をするのは嫌だ」とお客の気持は離れてしまいます。

さらに話を聞いて下さる人には絹の機能性（気化熱で体温を奪われる時間が短いので、身体の消耗が抑えられる、防紫外緯線性、保湿性、抗菌性、防臭性、血流促進、緩衝性等）を手短かに相手の興味ある所から話す。光る絹や蜘蛛の糸などマニアックに質問してくる人には、それを作る過程やその将来性をゆっくり語ってあげなければ購買に結びつきません。現在の絹に関する販売のサービスとは価格をさげる事以上にそれぞれのお客様が抱く絹に対する疑問に丁寧に答える事だと思います。

この様な諸事に対応出来る人材を一日も早く、一人でも多く育てなければ、絹は遠からず日常生活に不必要で手間のかかるむずかしい物として庶民の前から姿を消してしまうでしょう。

現在日本では養蚕や製糸業の衰退と共に養蚕技術や物性の現役の研究者は殆どいなくなってしまいました。しかし高齢化したとはいえまだまだ活躍出来る人はいますので、この方々が健在の間に少しでも多くの事を一人でも多くの人に伝えておかねばなりません。そして販売などの現場で正しい知識を的確に伝え事が出来る人材を育てなければなりません。

この様なせっぱつまった思いが開講の動機です。

【オープンカレッジの主な内容】

理論と体験、実習を行い〔絹の魅力を探る〕。

座学は絹糸昆虫の種類と世界の分布、糸の特性、構造。絹の歴史、知っておきたいシルクの常識。

シルクの機能性、最先端技術（遺伝子組換など）。

体験：繭から糸を揚げる、紡ぐ。

実習：草木染めをする。シルクパウダ、蛹を美味しく調理試食する。などが骨子です。

他にオプションとして機織工場見学、染色教室、泥染、藍染、貝紫染めなど染色体験ツアー、海外染織の旅、日本野蚕学会などの研究会、講演会、野蚕飼育援農等に参加。

短歌に詠まれた茂吉

—あるいは茂吉を詠んだ歌人—　五十八回

「月虹」　鮫島　満

十七　鹿児島寿蔵　2

本稿は、本誌平成二十六年八月号「十七　鹿児島寿蔵」の続稿である。

医に歌にこころとほしてみよはひのさかえたまふをつつしみ仰ぐ

『茉莉花』昭和十七年

子規左千夫ただにうけつぐわが大人のおのれを遂げし大きいのちや

言霊もあひよりきたり仕ふると君が生命を常世に継がめ

題詞に「斎藤茂吉先生還暦」とある。茂吉は明治十五年五月十四日に生まれているから昭和十七年が還暦である。

一首目は茂吉が医者としても歌人としても一家をなすほどの存在であることを讃えている。二首目は根岸派を興した正岡子規、根岸派を指導し「アララギ」を主導した伊藤左千夫を正当に継いで発展させた茂吉の偉大さへの讃嘆である。三首目は「アララギ」に学ぶ一人としてその心を後世につないでゆく覚悟を詠んでいる。

さだめありて早く過ぎにし大人たちに君の六十路のさかえ告げたき

同

和面に眉すくよかの君見れば超えがたきを越えし人と思へず

君がため川すなどりはよき鰻市にぞ持て来君は飽かぬに

一首目は、定めにしたがってすでに亡くなった「アララギ」の指導者たちに茂吉の健やかな還暦を知らせたいものだというのである。二首目は柔和な面ざしを見て居ると多くの艱難を乗り越えた人とは思えないと詠んでいる。三首目は、川漁師よ茂吉の好物の鰻を持ってきてくれと願っているのである。

たけりけむ炎のあとのしるき庭けさのひかりに笹の芽の露

『春露』昭和二十年

童馬山房のあとはうづたかき白き灰君が二万冊の書のなきがら

焼あとにありのままなる形にてくづれぬ灰を見るはいたまし

焼けはてて良き大人たちもともがらも寄るにすべな

し遠く離れて
ひかり照りて焦土のにほひ胸をつく此処にいつの日我らつどはむ

題詞に「六月一日青山」とある。昭和二十年五月二十五日の東京空襲によって全焼した青山脳病院、茂吉の自宅跡を訪ねたときの歌である。火災のとき茂吉はすでに山形に疎開していたが、残っていた家族は焼け出された。

二首目は茂吉の蔵書が灰になったことを詠んでいるが、茂吉は大正十三年にも病院、自宅の全焼を経験していて「焼あとにわれは立ちたり日は暮れていのりも絶えし空しさのはて」「焼あとに掘りだす書はうつそみの屍のごとしわが目のもとに」(『ともしび』)等と詠んでいる。作者の脳裡にはこの歌もよみがえっていただろう。

四首目は、火災を見舞うはずの人たちも今は戦火を逃れて遠くにいることをしかたのないことだと嘆いている。五首目には「アララギ」の会員が集まる日がいつかくるのだろうかという気持ちを詠んでいる。

ましらひげふすさに時にひかるをば仰ぎてわれは言問ひ申す　『求青』昭和二十一年

疎開先の山形県大石田町に茂吉を訪ねたときの歌である。この時茂吉は左湿性肋膜炎がようやく癒えるところでまだ看護婦の手を煩わしていた。

茂吉の歌碑建つ頂はゆきがたく樹氷のあひに冷酒飲みあふ　『やまみづ』昭和二十四年

何人かで冬の蔵王山に行ったのであろう。「陸奥をふたわけさまに聳えたまふ蔵王の山の雲の中にたつ」が刻まれた歌碑の建つ山頂までは行けず、途中の樹氷の間で冷酒を飲んだというのである。茂吉はすでに昭和二十二年十一月に東京世田谷代田の自宅に帰っている。

先生の食ひしろだけの牛肉を買ひて電車のきたるを待てり　『群緑』昭和二十四年

ひえびえとなりて朝あさ目覚むると言ひたまへるをつくづくと聞く

大正十年にまみえたるより三十年のうつりかはりに老いたまひけり

題詞に「代田へ」とある。敗戦後の苦しい生活の中で茂吉一人分の牛肉を土産に買って訪ねるというのが一首目。三首目は、初めて茂吉に会った大正十年から数えると三十年になるが、その間の時の動き、大戦の激動の中での茂吉の加齢、衰えを嘆いている。

楽しい時間　44

2016年5月31日

山本紀久雄

「イスラエル旅行・・・その二」

5月連休はイスラエルツアーに参加した。総勢40人という大人数である。理由は「安いこと」「イスラエルツアーはこの旅行社しかないこと」「話題のエミレーツ航空を体験できること」等で、同行の添乗員は、人数を確認する手間で、成田空港から苦労の連続だった。

イスラエルには昔から興味を持っていた。若いころ、ロケット博士の糸川英夫先生が主宰する六本木の勉強会に毎月参加し、様々な教えを受けたが、糸川先生がイスラエルのキブツKIBBUTZ、ヘブライ語で「集団・集合」を意味する共同村について、何度も興味深い解説をされたので、いつかイスラエルに行きたいと思うようになった。

その後、地方都市の活性化で一緒に仕事することになったアメリカ人女性が、ユダヤ人でイスラエルのことをいろいろ教えてくれ、一緒に行ってガイドしてくれるということになっていた。だが、ご主人の転勤でワシントンに帰ってしまったので、機会がないままのところに、今回のツアー企画を新聞広告で見つけ、すぐに申し込みしたのである。

成田空港からエミレーツ航空の行き先はドバイ、そこで再びエミレーツ航空に乗り換えてヨルダン・アンマン空港に到着。

何故にイスラエルの空港に着陸しないのか。それは日本の航空会社がイスラエルに直行便を飛ばしていないからである。イスラエル側は直行便を期待し、政府関係者に働きかけているが、何せイスラエルへ旅する日本人は年間３０００人にすぎない。月平均２５０人、一日にすると平均８人強というわけで、これでは完全なる赤字路線となるから飛ばせない。

では、どうして日本人旅行者は少ないのか。それはイスラエルのイメージが悪いからで、一般的には安全面で不安視されているからである。

因みにイスラエルを訪れる海外観光客は２００万人と少なく、日本人だけでなく、世界中から安全面で危惧されていることが分かる。

アンマンはヨルダンの首都で、同国の政治・経済の中心。紀元前17世紀以来の古い都市で、古代にはフィラデルフィアと呼ばれ繁栄していた。しかし、その後度重なる地震や戦乱によって衰退し荒廃した。当地は一寒村となっていたが、20世紀初頭にヨルダンの首都となり発達した。

アンマンの人口はおよそ１２０万人、ヨルダンの全人口の4分の1ほどにも及び、近郊を含む都市的地域の人口では２５０万人。

アンマンのクィーンアリア国際空港の入国パスポートチェック

は変わっている。地元の観光会社らしき男が来て、添乗員が提出したツアー参加者の名簿順に、みんなを一列に並ばせ、添乗員から受け取ったパスポートの顔写真ページを見つつ一括し、その集めたパスポート束を空港係員に渡し、その係員の前を何のチェックもなく通過し入国となった。

通常の入国で押される、パスポートへのスタンプはなし。何か記号みたいなものが印刷されている白い紙が張ってあるだけ。

空港建物を出て、すぐにバスに乗る。バスは西のイスラエル国境へと目指し走るが、周りは砂漠地帯。道路端の石造りの家が、壊れたままのところが多い。しかし、そこに住んでいるような気配もある。

目指す国境は「キング・フセイン橋」、ここはヨルダン川に架かる橋で、ヨルダン川西岸地区に住むパレスチナ人がヨルダンとの間を往来する仮国境とのこと。従って、ヨルダン人とイスラエル人は通行できない。イスラエル人、ヨルダン人を除く日本人のような第三国人の出入国地点であり、正式な国境ではない。国境近くになると、写真禁止の通告が出る。

到着した「キング・フセイン橋」は、テント式の屋外建物。日差しは厳しい。クーラーは当然になく、大きい扇風機が動いているが、それが沙漠の砂もまき散らして向かってくる。この時点で、何となく咽喉の感覚が苦しくなる。前途多難な感じに襲われる。

ここで最初にすることは、係がいる窓に開いた小さな穴にパスポートを出して、バックのタグを受け取り、バックに貼って検査台に乗せる。バックを検査台に乗せるのは、ポーターがやってくれるのだが、そのタグを受け取るまで時間がかかる。

次にわけがわからないが、別の小屋にいる男に再びパスポートを出し、紙を貼ってもらい、次の建物の中に入って、手荷物検査を受ける。

それが終わってから、入国係員の前に立ち、一人ずつチェック受け、また紙、これには顔写真が貼ってあるからビザとわかるものを受け取るが、ここでもやはり、パスポートにスタンプを押さない。押さない理由は、イスラエルへ入国したことが分かると、アラブ諸国に旅行できなくなるからとのこと。

それから最後にもう一か所でパスポートのチェック受け、ようやくバックが集積された場所に辿りつき、自分のバックを手にする。結構大変な手続きである。

イスラエル側に入ると、そこには日本人ガイド男性がいる。ベテランらしい態度で出迎えてくれる。

最初に向かったのは死海である。死海の説明はいらないだろう。あまりにも有名な観光地である。一応、参考までに、写真を紹介する。

自分も死海で浮遊体験をしたが、見苦しい写真なので省き、泥パック女性と、イスラム女性だけにした。海面下４００mに位置する塩分が通常海水の10倍あるから浮く。次号つづく。

楽しくマナー（13）

辻　照子

「紹興酒と老酒」

中国の浙江省紹興の街で造られた老酒は、紹興老酒と云い、他の土地で同じ製法で造られたものはその地名＋老酒となり、上海老酒は上海で、福建老酒は福建で造られたものです。

２０００年４月に中国政府は紹興以外の土地で造られた老酒を「紹興酒」と言ってはならないと発令しました。

老酒とは「永く寝かせたお酒」という意味が含まれていて、紹興酒は、「老酒の王様」と言われ永く（最低３年以上）熟成させないと美味しくならないお酒です。

紹興酒はストレート、ホット（人肌位のぬるめの燗）、オン・ザ・ロックで飲む事で香・甘味・深みを様々に味わえます。

梅酒を加えて梅ロック、クラッシュアイスで一気に冷やしレモンを入れたロック、紹興酒に半量の温かい烏龍茶やジャスミ茶を加えてホットで、ジンジャーホットはぬるめに燗した紹興酒に生姜の千切りを浮かべて、体が温まり寒い冬に最適です。

中華料理には四川料理（マーボー豆腐、海老のチリソース、担々麺、バンバンジー、回鍋肉等）上海料理（上海蟹、豚の角煮、ショーロンポー等）、北京料理（北京ダック、羊肉のしゃぶしゃぶ、チンジャオロース、水ギョーザ等）、広東料理（酢豚、フカヒレ、燕の巣のスープ等）の独自の料理として発展した地方料理があります。

中華料理のレストランで見かける回転テーブルは、日本が発祥の地で、回転するタイプの円卓では時計回りに回し、料理は上座の人からとりわけることができるように、目の前に料理が置かれた場合でもテーブルを回します。

上座は入り口から遠い席で入口に近い席は下座となります。

食事をするとき、日本料理のように器を手にもって口に近づけず、器や皿は持ち上げず、箸とレンゲだけを口に持っていき、スープもレンゲでいただきます。

取り皿は料理ごとに取り替えて、使い終わった皿は重ねて邪魔にならないところに置

き、回転テーブルの上には乗せないようにします。
３種類の紹興酒をストレートで味わった後、梅酒、炭酸、レモン、生姜を好みで加えカクテルにして楽しみました。
梅酒が一番人気で、スッタフが昨年仕込んだ梅酒はすぐになくなってしまいました。
簡単酢豚の揚げたて豚肉をそのまま食べても味がしっかりとしていて柔らかくお酒のつまみにちょうど良いと、召し上がっている班がありました。

＊簡単酢豚

材料（４人分）
豚薄切り肉３００ｇ　茄子１本　人参１本　ピーマン１･５個　玉ねぎ２／３個　サラダ油適宜
Ａ（生姜すりおろし１片　酒・醤油各大１／２　胡椒少々）　卵１個　片栗粉大２
Ｂ（ケチャプ・酒・砂糖・醤油・酢各大１　鶏がらスープの素小１　片栗粉小２　水１００cc
①豚肉はＡに漬け揉みこみ、卵と片栗粉も加え混ぜ、１枚分づつくるくる巻く。茄子・人参・ピーマンは乱切り、玉ねぎはくし型に切る。
②人参は茹で、茄子は素揚げにし、豚肉は揚げる。
③鍋に混ぜたＢと玉ねぎを入れ、火にかけ煮立ったら②とピーマンを加える。

＊棒棒鶏風サラダ

材料（４人分）
鶏むね肉１枚　きゅうり１本　塩・酒各適量
Ａ（すりゴマ大２　醤油大１･５　砂糖・ごま油・酢・みそ各大１）
①鶏肉にフォークで刺し、塩と酒をふりラップをしレンジ（１００ｇ－２分）加熱し自然に冷まし手で割く。
②細切りにしたきゅうりと①を、混ぜたＡで和える。

＊ごま香るクッキー

材料（４～６人分）
薄力粉１５０ｇ　砂糖60ｇ　塩少々　ごま油大３
①薄力粉、砂糖、塩をビニール袋に入れ振って混ぜ、ごま油を入れてなじませ袋から出しひとまとめにし棒状にし２～３㎝切り、丸めてクッキングシートを敷いた天板に並べて、１７０℃のオーブンで20分位焼く。

「歴代天皇御製歌」（五十九）

貫名海屋資料館

「後村上天皇」第九十七代・在位一三三九年（十二歳）・一三六八年（四十一歳）南朝・第二代

後村上天皇は、後醍醐天皇の十二番目の皇子。
父、後醍醐天皇の遺志を継ぎ、南朝の京都回復を図る。『神皇正統記』の完成。和歌を二条為定に師事。『内裏千首』『内裏三百六十道歌』、准勅撰集『新葉和歌集』・・・入集詠進された。『源氏物語』に関心を寄せられ、禅を極め、琵琶、箏、書道・・・に長けられた。

春
いづる日に春のひかりはあらはれて年たちかへるあまの香久山　新葉　1

夏
夏草のしげみが下のむもれ水ありとしらせて行く蛍かな　新葉　233

秋
年をふる鄙（ひな）のすまひの秋はあれど月は都を思ひやらなん　新葉　321

冬
きくたびにおどろかされてねぬる夜の夢をはかなみふる時雨（しぐれ）かな　新葉　432
すなほなる昔にかへれたねとなる人のこゝろのやまと言の葉　新葉

童謡『ざくろ』

高橋育郎　作詩
渡邉玲子　作曲

ざくろ　ざくろ
ぽっかりと
われて　あかいみ
ルビーの　ようだね
こかごに　つんでる
おばあちゃん

ざくろ　ざくろ
あかねぐも
ぼくと　おとうと
いとこも　いっしょ
みんなが　ならんで
みているよ

ざくろ　ざくろ
かがやいて
もぎたて　ならべて
かぞえて　みたら
みんなと　おなじで
うれしいな

「氷魚」のことから（186）

岡本八千代

あたかも今日は「伊勢志摩サミット」の日。（2016年5月26日・27日）世界の主脳人が賢島に集い、開催される日。日本の安倍晋三首相、米国のオバマ大統領、ドイツのメルケル首相、イギリスのキャメロン首相、フランスのオランド大統領、イタリアのレンツィ首相、カナダのトルドー首相。EUのユンカー欧州委員長、EUのトウスク欧州理事会常任議長、計9人の集まりであった。おそらく、世界経済や難民対策、テロ対策等々の解決の道を探るとか？いずれにしても、世界平和のためになるような話し合いがなされるのであろう。？。

さて、漱石と子規のことを書こうと思って「別冊太陽」の「夏目漱石」の本をめくっていたら、なんと一枚の絵ハガキが出てきた。それは、「水彩画『紫陽花図』」（私製はがき仕立）の漱石が描いた紫陽花の花の絵ハガキであった。この本の特別付録であった。私は嬉しくなって、さっそく小さい額に入れて飾った。

それにしても、漱石の絵もすばらしい。子規の絵も気どらない美しい絵だ。と感ずる。

漱石の教師としての月給がよかったので、子規に小遣いをそっと蒲団の下へ二、三枚の紙幣を敷きこんでやったりしても、子規はあいかわらずの調子で、漱石の心づかいにさほど感謝している素振りも見せずにいたという。

実は子規は、日本新聞社からの月給は、東京の留守宅にいる母と妹の生活費に当てられていた。彼が素寒貧の状態でいることは誰の眼にもあきらかであったので、漱石は俠気を出したらしい。

子規は何でも自分が先生のようなつもりでいる男だったらしい。俳句を見せるとすぐそれを直したりけん点（文字のわきにつける小さなまる印。傍点など。）をつけたりして返したりした。

それで今度は英文を綴って見せたりすると、「奴さんこれだけは仕方がないものだから、Very Good と書いて返した」といわれている。（江藤淳の「漱石とその時代」を参考にした）

かくして、子規が階下で、漱石が二階に住み、この愚陀仏庵に、柳原極堂をはじめ、全国最初の子規系の俳句集団である「松風会」が生まれたのであった。メンバーは、中村愛松、野間叟柳、伴狸伴等が頻繁に集まり、句会を催したのであった。

子規が、明治28年（1895年）9月8日付で門人の五百木飄亭に宛てた手紙に、「夏目金之助の愚居の一室に御座候。毎晩三、四人俳士来集、運座（句会）を催し候。初心ながら熱心のほど感入候」とある。

かくして漱石もこの「松風会」に入会して、俳句の勉強をはじめたのであった。そして、ついに漱石には二千五百余句の俳句がのこされているのであった。

次回へ。

「佐渡が島」を地図で辿る（3）

夏目勝弘

四　牛の荷鞍

博労について赤泊へと小山を辿る。素足に草鞋を穿く博労の踵には赤く腫物があり、白く膿を持っている。その腫物を見ながら山道を行く。

立ち止った所から下に深い谷が開け、木立の繁みの間から、白糸を幾つかに裂いたような滝が見える。博労が白岩尾の滝と言う。

五万図で見ると、犬落沢あたりであろうか等高線から二百メートルぐらいと思える。

滝壷まで行って見たいと云うと彼はソバの畑は急斜面で曲りくねっており、足の踏み所が悪い。

谷へ下りると水流を狭い石から石を跳ね水の深い所は岸の芒の根を踏んで行く、芒の根は草鞋がすべる。

ようやく滝の下まで行きつき、仰いで見ても枝々に遮ぎられて見えない。

水が足らぬと言うと、博労は雪解の頃なら水量も多く枝々に葉がない、それは立派だと博労が弁解をする。

荊棘の間をもとへともどる。躰を屈めると荷物が胸のところまでさがってくる。からげた尻には岩打つしぶきが冷々とかかる。

ようやく小径を出たときは指から血が少し出ていた。小さな水田のある所へ出た。水田といっても筵の五枚六枚位しかない。

山の斜面にはソバの花が咲いている。博労の説明では、山の木を倒し枯れた所で火をつけて、ソバでも豆でも撒いておくだけだと。

少し行くと小さな池があり、小さな島があり不思議なことに清水が湧き出て、旱でもここの水は乾かないと博労が続けて話をする。

この池のほとりで山伏が呪文を唱えて居たことがあり、子供たちが草刈に牛を曳き來て山伏の呪文を眞似していたら荷鞍が踊り出して、そのまま池のなかに入り島になったと。小山の頂　この池のほとりで山伏が呪文を唱えて居たことがあり、子供たちが草刈に牛を曳き來て山伏の呪文を眞似していたら荷鞍が踊り出して、そのまま池のなかに入り島になったと。小山の頂を行くと芒の穂の上に海洋が表われた。

五　漁村の能

俄雨のあとの草が日の光にきら〳〵と差す、ようやく赤泊の海が見え出した所は（等高線で見ると百メートル程の小山であろう）、その小山の裾に三角形の白帆が紺碧の水を辷るように走っている。そして遠くに弥彦山の皺が一つ〳〵見える程に近く見え、後に連なる越後の山々も今日は、はっきりと見えた。

山をおり海が近くなった木立のあたりで博労が、突然ああ能があると駈け出した。

田に添って茂った木立に入ると、笛の音が聞こえ、すると大きな寺があり、本堂の廊下に人が二杯に居る。

平内さん能う來たがもう二番すんだと小さな出店の婆さんがいう。

三番目には三井寺とある。そして三井寺を観ていると「アレは小木の桶屋だ相ですね」と狂女をさした。博労の家を尋ねた桶屋の主だ。

博労の平内さんも若い時分には先生についたことがあるため、能の知識がある。

六　草鞋

赤泊は越後の寺泊と相対している。宿で博労と別れ船に乗る。

佐渡の牛は小さいから飛禅へ持って行けば高値で売れる。だから船は柏崎に行くという、予定していた寺泊ではない。諦めていたところ風向きが変わり、寺泊に変更となり安堵する。美人さんが木槌で叩いてくれた草鞋は足に優しかった。その草鞋を水夫が濯いでくれたも乾いていた。草鞋の緒を強く結び、弥彦山を目指す。

「文化のみち二葉館」への書

短歌雑誌「三河アララギ」のこと

岡本八千代

「三河アララギ会」は、昭和七年（一九三二年）に、本名今泉忠男、ペンネームは御津磯夫として、東三河に在住したアララギ会員をまとめて、「三河アララギ会」を設立されました。会員には、各地からの要請のあった講演会や研究会などには、暇を惜しまず出席して勉強をすすめられました。

昭和二十九年（一九五四年）には、月刊短歌雑誌「三河アララギ」として創刊され、これを主宰されました。実は、奥様の今泉米子さまも歌人で、お二人で歌会や編集会にも尽力してくださいました。

御津磯夫先生は、大学医科の学生時代から、島木赤彦、斎藤茂吉、土屋文明、岡麓に師事されていて、大正十年（一九一二年）には、アララギ会員になっておられました。

三河アララギ会は例会というのが一ヶ月に一回は必ずあって、会員は、出席して勉強をしました。四十余名の会員は欠席者もあまり無く。自分の考えをこもごもと発表しました。また、他人の歌を読む時、読み方が下手で注意されたり笑われたり、熟語の意味が分からなくて恥ずかしい思いをしたりして、自分をさらけだしていました。

会場は、主に先生のお座敷、襖などを全部外して、机を幾つも並べて向かい合って坐って会は進められました。お茶は先生だけ、会員は無しで、休憩も無しです。一時から四時までで、司会者も一人で見計らって進めて下さいました。自分自身で席を外す時は静かにわからないようにしたものです。不思議なことに先生は一度も席を外されたことが無かったのです。

先生は、毎日、歌を創作されましたので一ヶ月百五十首ぐらいになり、その中で選んで一頁分四十首誌に載せられたりされました。会員の私たちは、入会したばかりでは、一首か二首を採って下さいました。それが何年かつづき、だんだんと勉強するようになってから、やっと

五首とか十首を採って下さるようになったのです。

先生のお姿には、いつも余裕をもって、楽しんで作歌しておいでになる雰囲気が漂っていたように思います。

先生は、「対象は常に自分の目の前にある。写生を大切にすれば、読む人は感動する」と説いて下さいました。歌の添削に当っては、会員の個性を重んじて言葉を選んで下さったかなと思います。

例会の時のことで印象に残っているのは、「人の作品を読むとき、その読み方が下手だと、せっかくいい歌でも変になってしまうから、読み方の勉強もしなさい」とも言われました。また、「短歌は五七五七七のリズムがあるのだから、声に出して調子をつけて読む練習をしなさい」とも言われました。また先生は、「短歌は流行歌ではないから、よくよく心に感ずるものを詠むように」とも言って下さったのです。

編集会は、先生の家の仏間の隣の座敷に集まり、大学の先生、もと校長先生、現役の先生方、男の方たちが数人、御津先生を中心に集まって編集をされていました。やがて年月がすぎて、女の人も一人か二人というようになりました。また時すぎて、女の方たちばかりになってきました。

御津先生は、「歌を詠むのは、作者その人でなければ見えない。感じられないもの、その人だけの感動であり、言葉が大切」とよく言われました。——忘れられないことばです。

かくして、御津先生ご夫婦もお亡くなりになり、現在、平成二十八年六十三巻第六号となって、東京から続けて今泉由利先生が三河アララギ誌を発行して下さっているのです。「続けることを『モットー』とせよ」と天空からの御津先生のおことばが聞こえてくるような気がします。

編集室だより【二〇一六年五月】

三河アララギ賞　森岡陽子様

子供達散った花びら集めきて花合戦と二手に別れ

見たままを、経験したままを、心のままに、神田生まれの目黒育ち、森岡さんの言葉で表現される。新しい短歌、本当の短歌の誕生です。

○「安行植木まつり」。染井吉野桜記念公園（駒込）「安行」の植木業、川口市北東部の台地、植木栽培の条件にめぐまれた地。
江戸時代、承応年間、安行村の吉田権之丞は江戸の大名屋敷に出入りし、珍しい植木の枝を折り、もち帰り、栽培し、植木業が盛んになったと。
〝なんじゃもんじゃ〟とは、大木と心得ていたのに、この市では、小さな盆栽になっていた。小さいながら大木のごとま白小花に埋もれて堂々と。〝西洋サンザシ〟のピンクの花。梅花うつぎのたおやかさ。
久し振りに出逢えた花々が心に染みる。

○「海へではない」、「新橋へ」〝牡蠣〟を食べにゆく。テーブルが、そのまま炭火コンロになっていて、牡蠣を焼く、海老を焼く、空豆、アスパラガス、長葱まるごと・・・白ワインが良い。

○ビルボード・ライブへ。
シンガー・ソング・ライター　〝ダイアン・バーチ〟ピアノを弾きつつ歌う。ビルボードの観客と一体感の舞台で、衣装も似合っていた。透き通る声・・・いつまでも残る。

○上野都美術館、若冲展。
混雑していることは知っていた。チケットはネットで直ぐ買えたから、出掛けた。都美術館を巡る大変な行列。裏の芸大の方にまで続く。あきらめて帰る。

○田原町の〝合羽橋道具街〟へ行ってみる気になった。最近は、家にある道具類も持て余すけれど、昔ながらの道具、最先端の道具、ディスプレイ、忘れ去っていたものにも出逢う。面白くてたまらない。気分転換の場所。

○漢詩系が多い詩吟クラスだけれど、私の俳句と短歌を先生が吟じて下さいました。字を目で追うのと異なった、リズムをもった立体感が生じてとても素的です。
俳句「こもれ日は落椿にもとどきけり」
短歌「富士山の見えざる景色ゆきゆきぬ花曇りとふ今日の薄雲」

○堀切菖蒲園へ。
堀切の花菖蒲は江戸名所として知られ、安藤広重、歌川豊国らの錦絵の題材となった。文化年間に、伊左衛門により栽培されたのが始まりという。

○東京芸術大学、アフガニスタン特別企画展へ。
『バーミャン大仏天井壁画』
内戦で海外流出し、日本で保護しているもの、破壊されたもの、保管品などを展示。
「ゼウス神像の左足」「カーシャパ兄弟の仏礼拝図」「バーミャン大仏の壁画」「天翔る太陽神の復元」。声もなく、沢山のことを、ずっしりと思うのでした。

野菜の花（1）

鈴　木　孝　雄

○ルッコラ
アブラナ科
キバナスズシロ属
葉野菜　ハーブ
地中海沿岸原産
一年草

ルッコラは若い葉を食べるもので、花を付けるまで放っておいた怠慢を恥じたものでした。

どころが、あるテレビ番組で、イタリアンレストランのシェフが「ルッコラの花は料理の飾りになるし、食べても美味しいですよ」と語っていた。早速、ルッコラの花を口にしれてみると、独特のゴマ様の香りと辛味・苦みは結構いける。今では見た目・味・香りの3拍子揃ったルッコラの花を皆さんに薦めているが、反応はいまひとつ。皆さん、試された方はいらっしゃいますか?

花言葉は「競争」「私に振り向いて」。花は2月から8月にかけて咲く。色はクリーム色で4枚の花弁が十字に細長く伸び、中に紫の筋が走る。花は同族のハマダイコンによく似ている。

エディブルフラワー（edible flower食べられる花）の国内市場占有約90%を誇る豊橋の組合の販売品目を調べたが、エディブルフラワーとしては、まだ販売していない。見た目がチョット地味のせいかも知れない。しかし、クックパッドで検索してみると、なんと19品目の料理が紹介されていた。ルッコラの花はもう市民権を得ているようだ。

現在50坪程の自宅近くの菜園で無農薬有機野菜栽培を楽しんでいます。その菜園の「野菜の花」を連載させてもらいます。
次回はナスの花の予定です。

お知らせ

△八月号の原稿は、六月三十日（木）までに、必着、郵送ください。

※毎月々の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配（日曜、祝日）を考え、早目に送付して下さい。

※原稿の返却を希望される方は、毎月の原稿に返却希望とお書き下さい。

三河アララギ誌発送に同封します。

▽原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A

〒一一四－〇〇二二　今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰（20字×10行）を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

「三河アララギ」について

◇三河アララギ誌・毎月発行。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制・廃止。既納会費は返却致しません。

◇これから講読を希望される方。一ヶ年分、四千円。振替口座〇〇八三〇－六－五六二二九。

◇会員、会員以外の方に執筆をお願いすることがあります。

◇短歌・俳句・論文・随筆など送稿することができます。

◇発行所開催の諸行事にどなたも出席出来ます。

◇三河アララギ発行所・〒一一四－〇〇二二
東京都北区王子本町一－二六－六－A
TEL・（〇三）五九二四－二〇六五
◇URL・E-mail yuriimaizumi@jcom.zaq.ne.jp
Homepage http://imaizumiyuri.jp/
◇編集・発行・今泉由利・森岡陽子
◇印刷所・株式会社　桜創美